

# コメニウスにおける新プラトン主義的諸相

相馬 伸一

## はじめに

コメニウス（コメンスキー：Jan Amos Komenský、一五九二（一六七〇年））は、ヨーロッパにおいては教育者である以上に神学者および哲学者と見なされてきた。しかし、日本では、その受容のプロセスが著しく教育学に偏ってきたという国際的に見ても特殊な事情がある。彼が『開かれた言語の扉』（*Janua linguarum reserata*、一六三一年刊）、『大教授学』（*Didactica magna*、一六三九年頃完成、五七年刊）、『世界図絵』（*Orbis sensualium pictus*、一六五八年刊）といった教育の内容と方法に大きな革新をもたらした著作を物したのは事実であるにしても、その背後には独自の哲学的主張があつた。そこには、ルネサンスにおいてひとつの頂点をなした新プラトン主義の影響が色濃く反映しているのがうかがえ、それが彼を一七世紀デカルト革命から隔てている。

そこで本稿は、コメニウスにおける新プラトン主義的諸側面をとりあげ、その哲学的思考の基本線を明らかにすることを試

みたい。最初に、コメニウスの思想的特質との関連で彼のプロフィールに触れ、その後コメニウスの思想における新プラトン主義的側面を三点にわたってとりあげる。最後に、一七世紀の他の思潮との応答関係およびコメニウスの位置づけに言及する。

## 一 コメニウスの思想的プロフィール

コメニウスは、一五九二年に現在のチェコ共和国東部のモラヴァ（モラヴィア）地方に生まれ、一六七〇年にアムステルダムで死去した。デカルトより四年早く生まれ、死去したのはスピノザが匿名で『神学・政治論』を出版した年ということになる。

## 一 宗教的基盤としてのチエコ兄弟教団

コメニウスを特徴づける第一の側面は、その宗教的傾向であろう。彼は幼児期に両親を失い、フス以来の改革伝統を受け継ぐチエコ兄弟教団（*jednota bratrská / unitas fratrum*）のもとで養育され、のちには教団の最後の主席監督となつた。チエコ兄弟教団は、フス自体とはかなり異なり、比較的穏和で寛容な立場をとつた。彼自身は、漸進的な千年王国論者であり、神とともに千

年王国の実現にあたる人間の営為を積極的に肯定する神人協力説 (Synergismus) をとつた。これが、人間の罪性を強調するプロテスタンントの基調とコメニウスを隔てていい。神人協力説は、大きくは神意を会得しようとする方向と人為の可能性を探る方向に展開する。前者に関しては、コメニウスには当時の予言者に傾倒し、予言集を出版するといった一面があり、のちにペール (Pierre Bayle, 一六四七～一七〇六年) は厳しく批判した<sup>(3)</sup>。後者の課題に関しては、宗派間対立の調停を企てる平和神学の構想があげられる。彼は、晩年にはその主張を先鋭化させ、プロテstanント教会間を越えカトリックを含むキリスト教世界の融合を主張するようになつた。そこで、現代のエキュミニズムに連なるような制度提案と教会の規則や典礼を偶有的なことがらとみなす素朴な信仰観が示されることになつた。

## 一 ルネサンス百科全書主義から汎知学へ

コメニウスを特徴づけるいまひとつ側面は、その哲学的思考の特質である。とくに重要なのは、彼が青年期にプロテスタンント改革派の学問的拠点であった現ドイツ領ヘルボルンに学んだことである。彼がヘルボルンに修学した当時は、百科全書主義者で千年王国主義者でもあつたアルシュテット (Johann Heinrich Alsted, 一五八八～一六三八年) がおり、その影響を受けた。その後、彼はさらにハイデルベルクにも学んだが、当時はバラ十字文書が出回った時期であり、彼はのちにその唱導者と目されるアンドレーエ (Johann Valentin Andreae, 一五八六～一六五四) とも個人的な接触を持つた。

修学後のコメニウスはモラヴァで牧師となつたが、間もなく三十年戦争が勃発し、神聖ローマ皇帝軍の追跡を受けることになつた。この時期、彼は現世の虚偽を批判する一方、神意への絶対的従属を説く慰めの書 (utěšené spisy) とよばれるパンフレットを多く著した<sup>(4)</sup>。

その後、コメニウスは、神聖ローマ皇帝によるプロテstanント国外退去令によって、壮年期からの生涯を流浪のなかに送つた。その足跡は、現在のポーランド、イングランド、オランダ、ドイツ、スウェーデン、ハンガリーにわたる。本格的な教育研究を行うようになつたのは亡命後で、一六三一年に著した語学教科書『開かれた言語の扉』は各國語に翻訳され、一七世紀のベストセラーともいいうべき普及を見せた。

しかし、ここで重要なのは、コメニウスが、「あらゆる人は、ほとんじより容易な実践から集積した何らかの外的な観察によつていたが、それはいわば経験的な (a posteriori) ものであつた。(中略) 私たちは、あらゆることを先驗的に (a priori)、言い換えれば、事物の最奥の不動の自然に基づいて示す」 [DK15I:39] とし、教育研究にあたつて一般的な前提と見なされる経験的・帰納的なアプローチをとらないことを明言し、先驗的な方法をとるとしたことである。

こうした一種の観念論的志向を基盤として、コメニウスは教育研究と並行して哲学的思索を深め、ラウレンベルク (Peter Lauremberg, 一五八五～一六三九年) の造語を借り、みずからの哲学を汎知学 (Pansophia) と呼んだ。彼のいう汎知学とは、端的にいえば、自然と人間と神にわたる統一的で普遍的な知の体

系をさし、大きく分けて百科全書主義と事物主義という二つの特質が見られる。

百科全書主義は、ヘルボルンでの修学以来、コメニウスの一貫した関心であり、それはいわゆる「七世紀危機に直面するなかで宇宙における人間の位置を再定義しようとする形而上学的意図に支えられている。彼は、一六一〇年代から百科全書的書物を構想したが、流浪の人生のなかで草稿を焼失するなど、たびたび思索の中斷を余儀なくされた。しかし、最晩年に至って、『人間に關することがらの改善についての総審議』(De rerum humanarum emendatione consultatio catholica 以下、『総審議』と略記)をほぼ完成させた。とはいへ、その存在はほとんど忘れ去られ、草稿が見つかったのは一九三五年、全体が発刊されたのは一九六六年のことであつた。その構成は、彼の世界觀に基づいた學問・宗教・政治・教育・言語にわたる社会改革の提言という体裁をとつた。

いまひとつの哲学的特質である事物主義については、コメニウスが語学教科書の編纂によつて名声を馳せたことからすれば奇異に思われるが、ここにはスコラ哲学とそれを背景とした教育における言語主義への批判があつた。彼の『開かれた言語の扉』にも言語主義の克服という契機はうかがわれるが、彼は汎知学研究の進展とともに、ラテン語を解する教養人のみならず、万人が事物そのものを学ぶ教科書として『開かれた事物の扉』(Janua rerum reserata)という著作を構想していった。そこで、「あらゆる者(omnes)があらゆること(omnia)に関してあらゆる側面から(omnino)分かることができる」こという構想が掲

げられた。ただ、彼のいう事物主義とは、のちに触れるように單なる感覺論ではなく、そのため最終的に残された『事物の扉』は、当初、彼が構想した簡潔な内容とは大きく異なり、非常に抽象的な内容となつた。彼の哲学的立場は、主としてここに集約されているといえる。

## II 汎知学の基本的性格

次にコメニウスの思想の哲学的特質に關して、①發出論がうかがわれる自然觀、②神の三書説 (tres libri Dei) に集約される世界觀と人間觀、③汎調和 (panharmonia) の思想について論ずる。

### 一 イデア (原型)に基づいて發出する精神と世界

コメニウスは、『開かれた事物の扉』(死後の一六八一年刊)で、「存在するものや生じるものには、いかなるものでも原理と基礎がある」 [DK18:152] と記し、それらをテクストによつてイデア (idea)・原型 (archetypus)・自然 (natura) といったさまざま用語で論じた。

このうちの自然について見ると、コメニウスは、『大教授学』で「私たちの最初の基本的な性質」および「神の普遍的な摂理あるいは神の善意が不斷に流入し、あらゆるものの中にあらゆるものを作り出すこと」と定義している [DK15I:60]。また、『自然科学綱要の補彙』(Ad Physicam addenda, 一六六三年刊)では、自然是「全世界および世界の物体に生得的で、存在や活動や静止を統合する力」とされている [DK12:210]。彼のいう自然是、神に起因し、それ自體で發出する力であり、世界のみならず精神にも

内在する力として把握されている。

コメニウスの自然観に見られるこいつした発出論的傾向が最も象徴的に示されているのが、光への注目であろう。彼は一六四一年にイングランドに招かれ、教育をはじめとした社会改革を提言する『光の道』(*Via lucis*, 一六四一年筆、六八年刊)という作品を著した<sup>(5)</sup>。その主題は、知恵の光の増大と普及によって社会に調和と成長をもたらそうというものであったが、その際に援用されたのが光のメタファーであった。彼は、当時の社会的危機の原因を、さまざまの方策が試みられていても、それらが第一に普遍的ではなく個別的であること、第二に自発性を引き出すようなものではなく強制的・暴力的であること、第三に実効があがらないという意味で無力であるゆえであると指摘した。そして、「世界において、天の光、すなわち太陽ほど、あらゆる人に共通で、あらゆる人と事物を楽しませ、形成し、造りかえるものは何とも見出しえない」[DK14:302] しかし、太陽の光に普遍性と自発性と実効性を満たすシンボルを見た。やむには、人間の認識過程から印刷術や航海術の普及といった知の伝播による社会変容までを光のメタファーから理論づけようとした。『光の道』からしばらくして、コメニウスは、さまざまの著作の扉に、太陽が輝き、万物が繁茂する様子を描いたデザインを掲げるようになった。そのデザインの周囲には、「暴力なくば、あらゆるもののはおのずと流れ出す (Omnia sponte fluant, absit violentia rebus.)」というモットーが記された。

こいつした光への注目には、コメニウスよりやや前の南スラヴ人パトリツツイ (Francesco Patrizzi, 一五二八~九七年) の影

響をうかがうことができる。全七部からなるコメニウスの『総審議』は各部の表題に *pan-* がついているが、一部の表題は、パートリツツイの『宇宙についての新しい哲学』(*Nova de universi philosophia*, 一五九一年刊)とまったく同じであり<sup>(6)</sup>、汎知学は全体として光の形而上学といつてもよい構成となっている。

こいつした発出論的傾向の当然の帰結として、コメニウスは生得観念論をとった。その背景としては、イングランド訪問時にハーバート (Eduard Herbert, 一五八一~一六四八年) の影響を受けたことが考えられる。『総審議』の第一部で、彼は、動物とは異なる人間の本質的働きとして、第一に事物を探究する知性 (*intellectus*)、第二に事物の善を追求する意志 (*voluntas*)、第三に選択したことを実現する能力 (*facultas*) をあげ、これらがあらゆる人間に共通で生得的であるとした [CCI:51, 78-79, 109-111]。そして、『総審議』第三部『汎知学』(*Pansophia*) では、それらを知性と意志と魂の光と呼び、やむには「あらゆる人間が考え、語り、行う、そのすべてによつて流れ出るものである。」[CCI:216] とした。やむには、こいつした人間本性の考察から知性を哲学、意志を宗教、能力を政治と関連させ、そこから普遍主義的な社会改革論を展開した<sup>(7)</sup>。

なお、コメニウスは精神を能動性ばかりではなく受動性においてもとらえている。光への注目において、彼は、精神を发光体といふいふ同時に光によって照らされる対象としてとらべ、精神の光 (*lumen mentis*) と精神の鏡 (*speculum mentis*) という比喩を用いた [DK18: 164, 241]<sup>(8)</sup>。やむに、『総審議』第三部『汎知学』には次のような言及が見られる。

「アリストテレスが精神を空白の板になぞらえたのは正しかった。最近のある作家（ハーバート）が閉じた本などぞらえたのも正しくない。前者は受動的な可能性にすぎず、後者はすでに実行された行為である。どちらも正しくない。両者の中間のどれかである。つまり、自分自身の力によつてではあるが、外部の対象の刺激によつて行動に導く、能動的な可能性なのである。つまり共通観念が単純に経験によるのでもなく、経験が共通観念に依存するのでもなく、相互に依存し合つてゐるのだ。」[CCI:367]

## 一 神の三書における人間と世界

次に、以上で概観した発出論的傾向において、いかなる人間観と世界観が構成されたのかを見る。コメニウスの人間観と世界観を理解する際に不可欠なのが「神の三書」という概念である。また、ここには、彼の哲学的思考が新プラトン主義的発出論を基盤としつつも、フス以来のチェコ宗教改革の伝統の継承と分かちがたく結びついていることが示されている。彼は、汎知学研究を本格化させた一六二〇年代初頭に著した『自然学綱要』(Physicæ synopsis, 一六二三年刊)で、すでに哲学の改革には「あらゆるものが感覚(sensus)と理性(ratio)と聖書(Scriptura)に向けて存在し作られているという調和的な還元法」が必要であるとし [DK12:76]、この見解を生涯維持した。最晩年の著作『必須の一事』(Unum necessarium, 一六六八年刊)には、次のように記されている。

「アリストテレスが精神を空白の板になぞらえたのは正しかった。最近のある作家（ハーバート）が閉じた本などぞらえたのも正しくない。前者は受動的な可能性にすぎず、後者はすでに実行された行為である。どちらも正しくない。両者の中間のどれかである。つまり、自分自身の力によつてではあるが、外部の対象の刺激によつて行動に導く、能動的な可能性なのである。つまり共通観念が単純に経験によるのでもなく、経験が共通観念に依存するのでもなく、相互に依存し合つてゐるのだ。」[CCI:367]

「知恵の三つの漏斗となるものは、I 生得観念に満ちていて、理性に照らされるべき健全な精神(mens)、II 被造物に満ちていて、感覚に征服されるべき世界(mundus)、III 顕示された秘密に満ちていて、信念(fides)によつて掘り当てられるべき聖書(liber Biblicus)である。(中略)この三冊の書のみが知恵を汲み出すための必須の一事なのだ。」[DK18:102]

この神の三書の見解が、精神と世界の平行性に立脚しているのは明らかだが、汎知学研究のなかで、コメニウスは、精神から世界を八段階にとらえる見解に展開した。それが示されているのが、『総審議』第三部『汎知学』である。しかし、この記述は、目次に示されている章が欠落していたり、記述がごく簡潔に終わっている部分が散見され、完成版と見なすことはできない。そのことを踏まえた上で概観する。

第一段階の可能界(Mundus possibilis)は、思考や表象といった精神の世界であり、いじでコメニウスは、人間は事物を数・大きさ・重さに還元して理解できるという見解を示した。

第二段階の原型界(Mundus idealis seu archetypus)は、第一段階がいわば鏡に写った像であらわすと、そこには写った像そのものにあたるとされる。つまり、事物に内在しているひやれる原型のレベルである。

第三段階の天使界(Mundus intelligibilis angelicus)は、第一と第二の不可視の世界と第四段階以降の可視的世界との接合部分として記述されているが、分量的にも少なく、記述は断片的

に終わつてゐる。

第四段階の物質界 (Mundus materialis seu corporeus) は、感覚でとらえられるものの世界を指す。ただし、ここでの記述は、即物的なものではなく、コメニウスが考へる自然現象の構成原理に基づいてゐる。

第五段階の技術界 (Mundus artificialis) では、「技術とは何か」という問題が論じられた上で、物体をあつかう技術と人間に關する技術がとりあげられている。人間に關する技術としては、学習術 (Ars discendi)、教授術 (Didactica)、弁論術等があげられている。

第六段階の道德界 (Mundus moralis) は、公私にわたる人間関係の世界であり、政治はここに含まれる。

第七段階は、宗教の世界としての靈界 (Mundus spiritualis) である。

最後の第八段階の永遠界 (Mundus aeternus) では、第一段階と第二段階での考察が再説されてゐる。

こうした『汎知學』の構成からは、コメニウスのイデア論的思考が明らかに看取される。しかし、彼はみずからがプラトンの信奉者と見なされることを警戒しており、たとえば、『大教授学』には次のような言及が見られる。

「完全さをめざした学校が今までにあつただろうか。ましてその段階に行きついたといえる学校はなかつた。私たちは、プラトンのイデアを追求してゐるを見られたくはない。ありもしない、そしてまたこの世では多分望めそうにもない

完全性を夢みてゐる見られたくはない。」 [DK15I:81]

その一方、コメニウスは、「あらゆる人があらゆることをあらゆる側面から知る」には、個々の事物すべてを知ることは言うまでもなく不可能であり、事物を構成している原理を学ぶことが重要であると考えていた。ゆえに、汎知學においては、「事物の中に存在するものよりもむしろ存在の可能性のあるものや存在しなくてはならないものが記述されるべきである。それは実際にイデアの學問であり、可能性の世界と呼ばれるべきである。」 [DK18:158] と論じられることになった。

### III 汎調和の思想

以上から理解されるように、コメニウスは、トリアーイデ的な思考でやまとまな問題を考察した。ある場合には、無理にトリアードに当てはめているように見える場合もあるが、常にそれら三項の調和を重視した。それを四点にわたっておさえておく。

第一は、コメニウスの學問的方法論である。彼は、「事物の部分は分析 (analysis) によつて知られるようになる。それにもかかわらず、総合 (synthesis) を加えることによつてさらに完全に認知されぬ。」 [DK15II:192-193] と述べ、分析と総合の方法に力を認める一方で、「望遠鏡や顕微鏡が発明された後でも鏡を捨てたわけではないように、アリストテレスによる分析と総合の學問的方法の發見によつて、愛すべき好ましい古代の類比 (syncretism) の方法を放棄してはならない」 [CC1:126-127] として、ルネサンス科学的な類比の方法も等しく重視した。

この背景には、類比の方法が「諸事物と並行しており、また並行しているために無限に調和している」[DK18:159] という認識がある。そして、これが合自然の原理につながる。ゆえに、たとえば教授の技術を考える場合、「あらゆることがらを教授し學習する技術の普遍的なイデアと考えられる秩序は、自然という教師以外の手からは受けとつてはならないし、受けとることはできない」[DK15I:94] として、自然現象に教授のモデルを求めるべきことを主張した。しかし、この見解は、当時の知識人にも奇異に映った一面があつたようで、彼の『大教授学』は厳しい批判を受け、出版が延期された事実がある<sup>(8)</sup>。

第二は、コメニウスが神の三書を受容すると見なしている感覚・理性・信仰の調和である。彼は、一六三〇年代後半以降、この見解を変わることなく維持し、死後に出版された『開かれた事物の扉』には、次のような言及が見られる。

「あなたは感覚・理性・信仰という水管を通して、知恵という通過して流れようと/orするすべての流水を感じ取ることになる。(中略) 天から与えられたすべてのことがらを結びつけて使用しようとせよ、個々のものを断片的に使用しようとする者は誰でも、当然、正氣ではない者であり、みずからもつれ、曖昧になり、自分の進行を妨げる。それは例えば、理性と信仰の光に頼らないで感覚という麻痺した指導者だけに頼つて、すべてのことがらを行なつてゐる俗人のようだ) 神に頼らないで悟りを得たいと思つてゐる知恵ある者

の場合も同じだ。最後に、理性と感覚の利用をすべて排斥したい思うほどまで、神の言葉だけにしがみついている神経過敏な者の場合も同じである。」[DK18:167]

こうした見解を維持する限り、コメニウスには感覚論と合理論が併存することになる。教授学を構想した彼は、イエズス会の学院が維持し、デカルトが批判した「あらかじめ感覚のなかになかったものは知性のうちにはない」という命題を一貫して支持した。そこだけを見ると、彼は素朴实在論者に映るわけであり、実際、かつての教育史教科書などでは、彼はセンス・リアリストと見なされていた。しかし、彼は、そのイデア論的思考から明らかのように、感覚知覚の限界も認識していた。この立場が、汎知学研究のなかで抱かれるようになつたのではないことは、『自然学綱要』の「理性は、事物の均衡を観察することによって、似ているものを似ている、異なるものを異なると結論づけ、感覚の欠点を補い除去し正すので、用いられる必要がある。」[DK12:77] この言及に明らかである。彼には合理的側面をもうかがうことができる。

第三は、存在の三様式における調和である。コメニウスは、汎知学研究のなかで、「概念による精神、舌による言葉、それら自体の実在性という存在の三様式に基づく事物の新しい三相」[CCI:205] を提示した。これらのそれぞれが、神の三書における精神(理性)・聖書(信念)・世界(感覚)に対応していることは容易に看取されよう。『総審議』第三部『汎知学』には、次のような言及が見られる。

「私たちの思考が実行されなければ何もない」と仮定する。だが、たしかに私たちは見たこと実行するために、連續的な順序で吟味する。すると、本質において、精神的なるもの（mentalism）・言語的なもの（verbalis）・実在的（realis）なものの間の違いが見えてくる。これまで私たちが見たのはすべて精神的なるものだ。そして、そのすべてに対して言葉を作ったがゆえに、それは同時に言語的である。さて、私たちは今、実在的なるものを捜す。すると、「私たちがこれらのことがらについて思考し話している」というもつとも実在的なものをすでに得ているのだ。私たちがいらないなら、私たちは思考することも多少とも話すこともできないだろう。非存在のもの（本質のないもの）は何も成さない。」

[CCI:216]

このには、合理的知性に優位を認めるデカルトのコギト命題との距離が認められる。コギト命題のさまざまな解釈のひとつとして、コギトを行為遂行と見なすヒンティッカ（Jaakko Hintikka、一九二九～）の解釈があるが、コメニウスが「私たちがこれらのひとがらについて思考し話している」という事實を存在の根拠としていることからすれば、ヒンティッカの解釈は、むしろコメニウスの言語レベルにおける存在分析に当てはまるように思える。<sup>(10)</sup>

第四にあげられるのが、三相の存在分析と対応する知恵の三角形（Sapientiae Trigonos）である。コメニウスは、これをさ

おれまな語で説明したが、一六四〇年代には理性（ratio）・発話（oratio）・行動（operatio）の三項を提示し、その調和的教育を重視した。

やいに、思考・言語・実在という存在分析に対応して示されたのが精神・言語（lingua）・手（manus）の三項であり、死後に刊行された『普遍的三相法』（*Trivium Catholicum*, 一六八一年刊）には次のような言及が見られる<sup>(11)</sup>。

「精神の鏡によつて受け入れられた事物は思考を与える。音を発して事物を形容する者は言葉を与える。思考や言葉が行動に転移すると再び事物となる。ゆえに、事物は自己の最初の本質ないしは存在に戻り、そこから、自分の泉から湧きでるかのように、思考・言葉・行動という川をとおして湧きでる。」[DK18:241]

なお、こじからコメニウスは、概念と言葉の対応における倫理学レベル、概念と事物の対応における論理学レベル、事物とそのイデアとの対応における自然学レベル、そして事物と事物そのもの（res ipsae）の対応における形而上学レベルという四重の真理観を立てている[DK18:190]<sup>(12)</sup>。

### III 一七世纪思想との比較をとおして

さて、以上で概観してきた哲学的特質から、コメニウスの哲学史的位置はどうのように理解されるだろうか。こじでは、通時的な位置づけと共時的な位置づけに分けて触れておく。

#### 一 一七世纪思想の第三勢力

すでに触れたように、かつてコメニウスはセンス・リアリス

トであるといった誤解もあつたが、一九世紀後半以降の近代的なコメニウス研究の進展にともなつて、典型的な新プラトン主義者として位置づけられるようになつた。たとえば、精神科学派のディルタイ門下のシュプランガー（Eduard Spranger, 一八八二～一九六三年）は、教育史を講じた際、コメニウスを次のように位置づけた。

「神学的＝スコラ主義的な覆いを突き破ろうとしていた科学の三つの方向が、当時はやくもくつきりと認められる。すなわち、デカルトによつて具体化された数学的＝合理主義的方向、ベーコンによつて軌道を与えた経験論的方向、そして新プラトン主義的＝神秘主義的方向である。コメニウスは第一の方向には縁遠かつた。——彼は決して数学的精神の人ではなく、未だかつて新しい天文学を信じたこともなかつた。もっとも理性の自然的な光については、彼もそれを承認している。第一の方向については、その成果をまだ見ることこそできなかつたが、彼はそれを賛美していた。しかし彼は自分の固有の基盤を新プラトン主義的＝神秘主義的世界観の中においていた。<sup>[13]</sup>」

キン（Richard Popkin, 一九二二～一九九〇五年）は、コメニウスを「神知学的思考や聖書の千年王国主義的解釈によつて経験主義と合理主義の要素を結合する傾向<sup>[15]</sup>」をもつた一七世紀思想の第三勢力（the third force）の代表者の一人と見なした。

イエーツはバラ十字運動を「挫折したルネサンス」「早すぎた啓蒙主義<sup>[16]</sup>」と位置づけたが、これはコメニウスの哲学史上の位置づけの理解にも示唆を与えよう。コメニウスの普遍主義的志向は、ルネサンス末期のカンパネッラ、ベーコンに直接に学んだものである一方、啓蒙初期のライプニッツとの間には、ライプニッツのコメニウスへの共感にもかかわらず<sup>[17]</sup>、大きな懸隔が認められる。

## 二 デカルトおよびデカルト派との応答

通時的な視点からコメニウスをルネサンスと近代とを媒介する位置に認めることができるとして、同時代の思潮との関係はいかにとらえられるだろうか。この点で注目されるのが、コメニウスがかなり鮮明な対立を示したデカルト及びデカルト派との関係である。

デカルトは、コメニウスの汎知学に共鳴した知識人がそのコメントを求めたことからコメニウスを知った。しかし、デカルトは、コメニウスの汎知学が神学的事項と世俗的事項の混淆であるとして批判的コメントを残した。それにもかかわらず、デカルトをめぐる人間関係としては異例なことに、一六四二年、ライデン郊外で両者の会談が実現した。ただし、この会談は両者の見解の懸隔を明らかにしたことで終わり、それ以後、デカルトがコメニウス研究の進展のなかでさまざまな視点から再解釈されている。たとえば、イエーツ（France Yates, 一八九九～一九八一年）は、一七世紀初期にドイツ・ヴュルテンベルクで勃興したバラ十字運動が一七世紀思想に与えた影響を大胆に叙述し、そのもとにコメニウスを位置づけた。また、ポプ

ニウスに言及することはなくなり、コメニウスは次第にデカルトを批判するようになった。

とくにデカルト派が力を得つつあったアムステルダムに移つた晩年、コメニウスのデカルト及びデカルト派への批判は強まつていつた。一六六六年、スピノザの友人として知られるマイエル（Lodowicus Meyer, 一六二九～一六八一年）が『聖書解釈者としての哲学』（*De philosophia, Sacrae Scripturae interprete*）を著し、それに対しコメニウスとも千年王国主義の立場を共有し、かねてから親交のあったコレギアント派神学者のセラリウス（Petrus Serarius, 一六〇〇～一六六九年）が反論を著した。セラリウスはその反論の所見の執筆をコメニウスに依頼し、コメニウスはその所見においてデカルトの自然学と形而上学を厳しく批判し、「デカルトは、かの第一でもっとも確実な命題と称される『私は思考する。ゆえに私はある』という麦わらの基礎の上に彼の全哲学を築いたのだ。」[DK23:34] と記した。さらに生前には出版されなかつた草稿には、「デカルト派は哲学における最悪の伝染病である」[DK18:45] という記述も残された。

セラリウスは、ロンドン王立協会の書記オルデンバーグ（Henry Oldenburg, 一六一五？～一六七七年）とスピノザの文通の仲介者として知られており、その立場はスピノザと共有可能な部分もあつたと思われる。また、コメニウス自身も、セラリウスとともに千年王国の到来を希求し、そのためユダヤ人の改宗を模索する過程で、ほとんどコレギアントといつてよい無教会派的な立場に移つていた。それにもかかわらず、セラリウスがスピノザ的な主張を先取りしたマイエルを批判し、コメニウスもそれに参画したのは奇異にも思われる。ここには、カルヴァン派的な教条主義とは一線を画し、宗教的・思想的立場の共存を模索する過程でデカルト的な理性の普遍性に一定の理解を示しながらも、マイエルやスピノザによるデカルト的モチーフのラディカルな貫徹は認められなかつたという、彼らの思想的立場がうかがわれるようと思われる。

## むすびにかえて——教育的ポテンシャルの発出

晩年のデカルト派との応答などを見ると、コメニウスは「遅れてきたルネサンスの普遍人」としての色彩が濃い。しかし、そのことはコメニウスの思想的「後進性」を示すだけなのだろうか。コメニウスは、日本においては教育分野に囲い込まれてきた嫌いがあるが、彼が学習と教育における一貫性のある論理を打ち出したのは事実である。教育は、感覚論的要求と合理論的要求、精神的側面と身体的側面、事物と言語といった対立的にとらえられるカテゴリーのいずれに偏しても、論理としては十分に作動しない。知能の指導を企図するデカルト哲学は学習論としての要件を十分に備えているが、そこからただちに教育的な人間関係や教育方法を導き出すことは困難である。<sup>(19)</sup> それに対して、新プラトン主義における世界と精神の照応という思想は、本質的に教育的な性格を帶びているとはいえないだろうか。そう考えると、コメニウスの場合に学習論を超えて教授論が成立しえた思想的要因として、彼が一七世紀において新プラトン主義を維持した事実が意味をもつてくる。

フツサールとハイデガーの現象学を批判的に継承した二〇世

紀チェコの哲学者パトチカ (Jan Patočka, 一九〇七～一九七七年)は、おそらくはスピノザの「永遠の相のもとに」を念頭に、「全宇宙が教育の相のもとに (sub specie educationis) 把握される」というのがコメニウスの哲学的立場であるとした。パトチカに従えば、コメニウスの哲学的思考の特質は、世界と精神の関係を相互が関係することによって変容する運動と見なす点に認められるといえよう。一七世紀、世界と精神の間に生じたと見なされた亀裂は、深刻な懷疑主義的危機を招來した。教育を含む彼の嘗みは、その克服をめざすものであった。その意味では、このように言つてもできるのかもしない。一七世紀危機に直面したとき、新プラトン主義の思潮は、その潜在的な教育的ポテンシャルをコメニウスを通して発出させたのではないか、と。

べきかとも考えるが、生涯の活動期の多くを亡命のうちに送り、ラテン語での著述活動で知られることが多いことから、本稿ではコメニウスで統一する。なお、コメニウス (コメンスキー) という名を彼自身が用いたのは記録上では三歳以下のことである。

(2) 当時のチェコ兄弟教団がおかれた状況については、エヴァンズの分析が興味深い (R·J·W·エヴァンズ『魔術の帝国——ルドルフ二世とその世界——』中野春夫訳、平凡社、一九八八年、四二～四六頁)。

(3) P·ベール『歴史批評辞典』野沢協訳、I、ピエール・ベル著作集第三巻、法政大学出版局、一九八二年、八〇六～八〇七頁。

(4)

慰めの書の代表作がチェコ語文学の古典とされる『地上の迷宮と心の楽園』(Labyrint světa a ráj srdce, 一六二三年筆、三一年初版、六三年第二版)である (藤田輝夫訳、相馬伸一監修、東信堂、一〇〇六年)。

(5) この著作はイングランド内戦の勃発のために出版されず、コメニウスは、晩年の一六六八年、新たに献辞を書き加えてロンドン王立協会にこの著作を献呈した。そこには、組織的目的を自然科学研究に限定し、宗教的政治的問題を回避した王立協会に対する批判がうかがわれる (拙著『教育思想とデカルト哲学——ハートリブ・サークル 知の連関——』ミネルヴァ書房、一〇〇一年、六四頁を参照されたい)。

(6) 伊藤博明「パトリツツイ」伊藤博明責任編集『哲学の歴史』(1) Comenius さくらん語表記であり、チョコ語では Komenský となる。原語表記を尊重するならば、コメンスキーハと表記す

- (7) コメニウスは、知性の生得性を生得観念 (notiones innatae)、意志の生得性を生得衝動 (instinctus innati)、能力の生得性を生得能力 (facultas innata) とした。facultas は単なる「能力」ではなく、行為をもたらす考え方れていた。
- (8) 前掲拙著、「八七～一八九頁を参照されたい。」
- (9) E・P・カバリー『カバリー教育史』川崎源訳、大和書房、一九八五年、二九三頁。
- (10) 前掲拙著、「一一〇～一一一頁を参照されたい。」
- (11) 教育思想史においては、一八世紀スイスのペスタロツチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 一七四六～一八一七年) による頭・心・手といった三項や、一九世紀イギリスのスペンサー (Herbert Spencer, 一八一〇～一九〇三年) による知育・德育・体育といった三項がよく言及されるが、コメニウスの示す三項はこれらとは異なり、徳の形成を特化していない点に特質が認められる。
- (12) コメニウスは、ここで事物とそれ以外との関連が断たれているために乖離や矛盾が一切生じないレグルを想定し、事物を存在させている根拠を「事物そのもの」と呼称したと思われる。
- (13) E・シュアランガー『文化と教育』村井実・長井和雄訳、玉川大学出版部、一九五六年、四八頁。
- 日本において、新プラトン主義者としてのコメニウスという理解をはじめて提示したのは梅根悟である。一九三四年執筆の「近世教育思想史における自然概念及び合自然原
- (14) F・イエーツ『薔薇十字の覺醒』山下知夫訳、工作舎、一九八六年、とくに第二章。
- (15) R・ポプキン「十七世紀思想における第三勢力——懷疑主義、科学、千年王国主義——」相馬伸一訳『日本のコメニウス』第九号、日本コメニウス研究会、一九九九年、七八頁。
- (16) イエーツ前掲訳書、一四八頁。
- (17) ライプニッツは、コメニウスの墓碑銘のための詩を草している。また、コメニウスの孫ヤプロンスキー (Daniel Arnošt Jablonský, 一六六〇～一七四一年) はライプニッツとともにベルリン科学アカデミーの創設に関わった。
- (18) 前掲拙著、「八七～一〇四頁を参照されたい。」
- なお、近年、デカルトによるコメニウス汎知学への批判的コメントがオランダで新たに発見され話題となつた (Jeroen van de Ven & Erik-Jan Bos, *Se Nihil Daturum / Descartes's Unpublished Judgement of Comenius's Pansophiae Prodromus* (1639). in: *British Journal for the History of Philosophy*, 12(3), 2004, pp.369-386. 拙稿「デカルト書簡の新発見をめぐって——コメニウス研究へのインベクトを考える——」『日本のコメニウス』第一六号、一〇〇六年、五七～六八頁)。
- (19) 前掲拙著、「一〇〇頁を参照されたい。」
- (20) Jan Patočka, *Komenský a hlavní filosofické myšlenky 17. století. Sebrané Spisy Jana Patočky*, Svazek IX,

理の発展 (コメニウス、ルソー、ペスタロツチ)」が『教育史学の探求』(講談社、一九六六年刊)に収められている。

F・イエーツ『薔薇十字の覺醒』山下知夫訳、工作

舎、一九八六年、とくに第二章。

R・ポプキン「十七世紀思想における第三勢力——懷疑主義、科学、千年王国主義——」相馬伸一訳『日本のコメニウス』第九号、日本コメニウス研究会、一九九九年、七八頁。

イエーツ前掲訳書、一四八頁。

ライプニッツは、コメニウスの墓碑銘のための詩を草している。また、コメニウスの孫ヤプロンスキー (Daniel Arnošt Jablonský, 一六六〇～一七四一年) はライプニッツとともにベルリン科学アカデミーの創設に関わった。

前掲拙著、「八七～一〇四頁を参照されたい。」

なお、近年、デカルトによるコメニウス汎知学への批判的コメントがオランダで新たに発見され話題となつた (Jeroen van de Ven & Erik-Jan Bos, *Se Nihil Daturum / Descartes's Unpublished Judgement of Comenius's Pansophiae Prodromus* (1639). in: *British Journal for the History of Philosophy*, 12(3), 2004, pp.369-386. 拙稿「デカルト書簡の新発見をめぐって——コメニウス研究へのインベクトを考える——」『日本のコメニウス』第一六号、一〇〇六年、五七～六八頁)。

前掲拙著、「一〇〇頁を参照されたい。」

Jan Patočka, *Komenský a hlavní filosofické myšlenky 17. století. Sebrané Spisy Jana Patočky*, Svazek IX,

Oikoyemenh, Praha, 1997, p.148.

なお、パトチカのコメニウス解釈については、拙稿「パトチカとコメニウス——デカルト的自我論との距離——」(『思想』、二〇〇七年一二月号、岩波書店、一五二~一六八頁)を参照されたい。

### 【付録】

本文に記したように、日本においてコメニウスは教育学研究によって囲い込まれてきたことは否めない。今回、新プラトン主義協会において、哲学プロパーの場でコメニウスがとりあげられる機会を設けられた学問的開放性と寛容性に敬意と謝意を表したい。シンポジウムの席上、有益なご指摘や啓発を与えてくださった司会者、提題者のお二方、フロアの方々に厚くお礼申し上げる。